「戦争と平和を考える2018―永井隆と平和への思い―」実施報告

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ　小　林　奈緒子

1．はじめに

島根大学附属図書館本館では、企画展「戦争と平和を考える2018―永井隆と平和への思い―」を開催した（以下、本展）。当館では、戦争や平和について、資料の展示を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することを目的として2014（平成26）年より毎年継続して企画展を開催してきた[1)]。今年は、永井隆の生誕110年にあたることから、その生い立ちや生き方をみていくことで、永井の平和への思いについて考えることができるような展示構成とした。

永井隆は島根県雲南市三刀屋町の出身で、旧制松江中学・松江高等学校卒業後に長崎医科大へと進学・就職し、放射線物理学の研究中であった1945（昭和20）年８月９日原子爆弾の被害にあい重傷を負った。永井は被爆前から白血病を患っており、被爆後症状はさらに悪化していったが、その中でいくつもの著書を出し、世へ平和の大切さ・尊さを訴え続けた。そしてそれらの一部は旧制松江高等学校図書館にも自筆入りで寄贈され、現在当館の貴重資料室にて保管されている。今回は、それらの資料に加え、雲南市永井隆記念館より資料や画像データを借用し、関連図書も含めた合計約94点を展示した。

関連イベントとして、２回にわたって開催したギャラリートークでは、担当職員により展示について解説を行った。本稿では、これら一連の企画展および関連イベントについて報告する。

2．企画展示について

2.1　企画展の概要

本展は、2018（平成30）年７月20日から同年８月31日まで、島根大学附属図書館本館１階展示室にて開催した。展示室は当館の開館時間にあわせ、平日は８時30分から21時30分まで、土日祝日は10時から17時30分まで開室した

（夏季休業期間中は平日のみ９時から17時まで開室）。開室期間は合計33日間で、入場者数は800人に上った[2)]。

2.2　開催の趣旨

島根県、特に雲南市では永井隆の幼少期を過ごした町として顕彰活動が盛んである[3)]が、「永井隆」=「平和を」という表象のされ方が多く、長崎出身である筆者にはずっと違和感があった。もっと具体的に言えば、長崎で感じていた「永井隆像」と、島根での「永井隆像」にギャップがあり、今回この企画展を通してそのギャップを埋めることができればと考えた。それはつまり、永井隆がどのような人物で、どのような生い立ちであったのか、その言動も含めて、現在彼についてどのような議論がなされているのかを提示し、来場者へ「永井隆像」を再考してもらうことであった。

先人の顕彰とは、地域住民（あるいは組織の構成員）の募金や時には税金が投入されることもあり、その活動の性格上、その人物への理解が一面的であってはならない。その人物をより深く理解したうえで、地域住民（あるいは組織の構成員）の広範な合意があってなされる活動であることが前提であろうと考えるからだ。永井隆は、その言動に関して学術上様々な議論があり、ひとまずそれらを理解することから始めたい。

2.3　企画展の核となる議論について

永井隆は、確かに戦後、平和を訴えていくつもの作品を発表した人物であるが、その言動については現在も議論されている。本節ではそれを紹介する。1945（昭和20）年11月23日、浦上のカトリック信者による原爆犠牲者の合同追悼祭が行われた。永井は信者総代として弔辞を読んだ。当時、「原爆は天罰なのだ。神は我々の罪を罰したもうて我々の家族を殺し、教会さえ焼きたもうた。」と説く人がいたが、永井は

> 「終戦と浦上潰滅の間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪悪の償いとして日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やされるべき羔（こひつじ）として選ばれたのではないでしょうか。
>
> …信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかった

わが浦上教会こそ神の祭壇に献げられるべき唯一の潔き羔ではなかったでしょうか。この羔の犠牲によって今後さらに戦禍を蒙る筈であった幾千万人の人々が救われたのであります。

…平和の光さし出づる八月九日、此の天主堂の大前に焔を上げたる嗚呼大いなる燔祭よ！…あの日、あの時この家で、なぜいっしょに死ななかったのでしょうか。…私らは罪人だからでした。今こそしみじみ己が罪の深さを知らされます。私は償いを果たしていなかったからのこされたのでした。」[4)]

と述べ、この弔辞により多くの信徒が励まされた。この永井の言葉は、後述するように長崎の戦後を考えるうえで大いに議論されることとなる。

広島は、三角州でおおむね平坦な地形である。広島での原子爆弾は市の中心部に落とされたことから、その被害は広く市街地全域に及んだ。一方で、長崎での原子爆弾は浦上という長崎市街地より北に位置する、山あいの集落に投下された。

その複雑な地形は、同じ市内であっても場所によって原爆被害の程度の違いを生じさせた。例えば浦上にほど近い長崎駅では凄まじい破壊力で建物等は全壊全焼しているが、さらに南に位置する長崎市街地や国宝・大浦天主堂を擁する南山手の地区などの被害は、爆風による窓ガラスの破損など建物被害はあったものの焼失を免れた（図１）[5)]。

被害の程度に差があることや市街地の被害が比較的大きくなかったことは、その後の原爆についての考え方や態度で、長崎市民の間に温度差や時には対立をも生じることになった。「原爆は長崎ではなく浦上に落ちた」「お諏訪さん（諏訪神社）が原爆から守ってくれた」などと市民の間で公然と言われるような被爆直後の状況が、永井の発言の社会的背景として存在していた。

また、永井は原爆投下後の救護活動を記した『原子爆弾救護報告書』の末尾に、原子爆弾という「新しい動力」について「明るい希望」として、「原子爆弾を生み出した科学技術を神に与えられたもの」として賞賛している[7)]。

カトリック教徒でもあった永井は、先述したように原爆投下を「神の御摂理」と解釈し、さらに、原爆死没者を「汚れなき小羊の燔祭（はんさい）（＝ホロコースト）」、生き残った被爆者は「神が与えた試練であり、神に感謝」すべきと説いていた。長崎大学名誉教授の高橋眞司はこの永井の考えを「浦上燔祭説」と提起

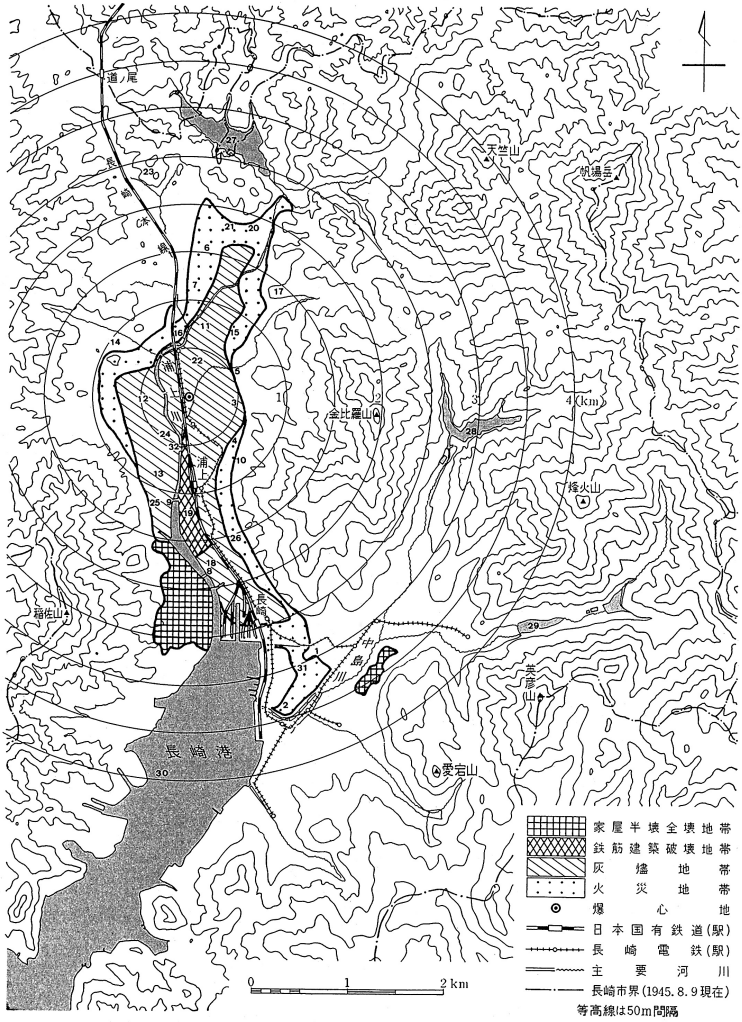


図4.5　長崎市の建物被害状況.

1 長崎市役所
2 長崎県庁
3 長崎医科大学
4 長崎医科大学附属病院
5 浦上天主堂
6 三菱重工長崎兵器製作所大橋工場
7 三菱重工長崎造船所大橋部品工場
8 稲佐橋
9 梁川橋
10 山王神社
11 山里国民学校
12 城山国民学校
13 瓊浦中学校
14 長崎商業学校
15 長崎工業学校
16 大橋
17 浦上第一病院(現・聖フランシスコ病院)
18 三菱重工長崎造船所幸町工場
19 三菱製鋼長崎製鋼所第一工場
20 西浦上国民学校
21 長崎師範学校
22 浦上刑務支所
23 三菱重工長崎兵器製作所住吉トンネル工場
24 鎮西学院中学部
25 淵国民学校
26 銭座国民学校
27 浦上水源地
28 西山水源地
29 本河内水源地
30 三菱重工長崎造船所
31 新興善国民学校
32 三菱電機長崎製作所鋳物工場

図1　長崎市街図[6)]

したが[8]、この「浦上燔祭説」は、次のように論評されることとなる。

1960年代に秋月辰一郎（医師）が「ついていけない」と述べたり、また1970年代には山田かん（被爆者、詩人）などから批判されたりなどした[9]。山田かんは永井隆の浦上燔祭説は「反人類的な原理をおおい隠すべき加担にほかならなく、民衆の癒しがたい怨恨をそらし慰撫する、アメリカの政治的発想を補強し支えるデマゴギー」と批判した[10]。また、1980年代に井上ひさしも、「永井説によればアメリカの原爆投下を正義の行いであったと強弁でき」、「神の摂理をもちだせば人間世界から責任者を出さずにすむわけだ。為政者にとってこんな都合のいい話はない」と批判した[11]。

高橋眞司は著書『長崎にあって哲学する－核時代の死と生』（北樹出版、1994年）などにおいて、永井説は戦争責任と原爆投下の責任を免除することになり、かつ、原子爆弾そのものの肯定につながるとして批判した。また永井が反共主義者であったことも指摘したうえで、戦争責任や原爆投下の責任の追及をしないままに、戦争を引き起こしたのは「私たち自身である」としたことは、結果としてアメリカ政府・GHQ・日本政府の思惑にかなうものであった、と述べている。そして永井が持てはやされるかたわらで被爆者の声はかき消され、被爆者援護は大きく立ち遅れることになった、と述べている。

これに対して、片岡千鶴子（長崎純心大学学長）は、原爆死没者を冒瀆することにもなりかねない「原爆天罰論」を排する目的で信徒に向けられた信仰上の発言であって、政治的文脈にからめて論ずるべきではない、とし、永井に戦争責任を考える余裕があっただろうか、と高橋らの批判は非現実的だと反論した[12]。

また、本島等（元長崎市長）は、江戸時代から連綿と続いてきたキリシタン（キリスト教信者）への迫害・差別・弾圧の果てに原爆の被害を受けて浦上の信徒は苦しみのどん底にあったが、同時に太平洋戦争が終わったことで初めて信教の自由が得られたのであり、信徒を激励し皆が一致して教会を再建するためには永井はそのように言うしかなかった、としている[13][14]。

これらをふまえて、近年、四條知恵が浦上の住人への丁寧な聞き取り調査をもとにまとめた著書『浦上の原爆の語り：永井隆からローマ教皇へ』（未来社、2015年）において、長崎における原爆被害の表象全般に関わる問題と

捉えられてきた、永井隆の燔祭説の受容に着目し分析を行っている。

四條は、占領期の浦上において、燔祭説が原爆の語りとして支配的な位置を占めており、浦上のカトリック集団において燔祭説をめぐる語りは、地域に根差した集団の中でこれまでの歴史的理解に沿って集団の存在意義を強め、集団を構成する人々の間に入った「ひび」を統合し、ひいては集団自体を生み出していくという意味、そして力を与えるものだった、としている。しかし、被爆者が高齢化し、社会状況が変化する中で、かつて緊密な結びつきを誇った浦上の地域共同体の結束は弱まるとともに、燔祭説の役割も薄れていった。そんな中、1981（昭和56）年のローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の来日を画期として現れた教皇の発言[15]をめぐる原爆の語りは、原爆被害の悲惨さ、残酷さを訴える周縁化された語りを掬い上げる役割を果たし、支配的な語りとして受け入れられていった、とも述べている。

このように四條の論では、浦上における永井の燔祭説の受容が解明されているが、一方で浦上という極めて限定的な地域しか言及がなされていない。永井の言説がどのように長崎市民に受容されていたのかを歴史学的に解明するためには、浦上外の被爆地、特に城山地区など、仏教その他の宗教が存在した被爆地全域を含めたさらなる調査・研究と、これらをもとにした広範な議論が求められている[16]。

2.4　準備と構想

今回の企画展の構想としては、永井隆に絡めて様々なテーマを提示したいと考えた。まず、先述した永井隆の言説についての議論が第一点であるが、第二点目としては、永井の生まれた旧田野医院に関連した、歴史的建造物の保存問題についての紹介である。

2013（平成25）年に永井隆の生誕の地であった松江市苧町の旧田野医院の一部が解体されるという事があった。その話や解体前に撮影された画像データなどがあることを、本学の名誉教授である竹永三男先生からご教示いただいており、いつか展示で紹介したいと考えていた。

旧田野医院は、洋風建築の様式を兼ね備えた木造２階建て建築である。建物は本館・中門とあり、永井隆の両親が住んでいたのは中門の部屋であった。この建物は1873（明治６）年に創設された私立苧町病院であると考えられて

図２　旧田野医院中門

おり、苧町病院として使用されていたこの建物は1886（明治19）年に田野俊貞博士[17]が所有し、安任堂田野医院が開設された。この医院は産婦人科医院として長く親しまれ、敷地内には永井隆が誕生した際に産湯として使用した井戸も残されていた。現在は松江市の所有となり、本館のみ現存している。このように由緒ある歴史的建造物の管理・保存をどのように行っていくかという問題は、松江市白潟本町の出雲ビル（松江市登録歴史的建造物第１号）、初代松江警察署庁舎（解体保存）にみられるように、市民にとっても課題であり、広範な市民の議論が待たれるところである。

第三点目は、長崎の被爆の実相についてである。島根の人々は地理的に近い広島の原爆被害については知っているが、長崎の被爆の実相についてはあまり知らないというのが、こちらへ住んでみて感じたことだった。そこで、長崎に投下された原爆そのものや、投下された経緯・その被害など、詳細なデータも含めたパネル解説を行った。

永井に関して展示を行うのであればいずれも外せないと考えていたが、結果として相互補完的な内容となり、より充実させることができたように思う。

以上の構想をもとに、準備を進めることとなった。準備に関しては、事前調査として雲南市永井隆記念館を訪ね、展示に使用したい資料をピックアップし、借用の依頼をした。ちょうど同記念館は建て替え工事のため休館が目前に迫っており、慌ただしい中にもかかわらず快く対応していただいた。大

型の額に展示されていた絵葉書や書簡といった借用できない資料に関しては画像データを提供いただいた。

旧田野医院の展示に関しては、先述したように竹永名誉教授から画像データを提供いただいた。これに関しては、事前に画像を展示に使用して良いか、当時撮影時に対応された田野家の田野博子氏にも連絡を取り、了解を得た。また、田野家が解体される際に記念に作成した田野家写真集（非売品）を竹永名誉教授から借用し、展示することができた。

また、第三点目の長崎の原爆被害についての展示は、関連図書の所蔵が当館にあまりなかったため、筆者の私物９点を展示に使用した。

2.5　展示内容

展示は、14枚のパネルとこれに対応する形で資料を紹介した。

一、「永井隆年譜」では、永井の生い立ちを年表にまとめ紹介した。

二、「永井隆誕生と田野家」では、永井隆が松江市苧町の田野医院にて生誕したことや、田野家との関わりについてパネル１枚にまとめ解説した。ここでは、雲南市永井隆記念館所蔵の田野熊一宛書簡（画像）についても展示を行った。

三、「コラム　田野家住宅（旧田野医院）」では、永井が生まれた田野医院について田野家と建物について紹介し、由緒ある歴史的建造物の管理・保存について述べた。また、解体前の風景を撮影したものを、田野家の写真集とともにケース展示した。

四、「学生時代～旧制松江中学・松江高等学校～」では、永井の旧制松江中学・松江高等学校（以下、旧制松高）時代の様子を当時のアルバム（当館所蔵）や写真を交えて紹介した。また、ここでは永井が旧制松高で初めてキリスト教と出会ったことについて、松原武夫教授との書簡（雲南市永井隆記念館所蔵）のやり取りからうかがえることも述べた。

五、「長崎医科大時代」では、長崎医科大学へ進学し、母の臨終の際に霊魂を感じたことや、長崎・浦上でキリシタンの信仰をも守る「帳方」との縁が深い森山家との出会いなどについて述べた。また、放射線医学を専攻し、診療で放射能の過量照射を招いたことなどから慢性骨髄性白血病となったことなどをパネル２枚にわたり紹介した。

図３　展示室中央ケース付近の風景

図４　展示室風景

六、「原爆とその被害」では、原爆についての解説と、長崎の原爆被害について詳細なデータを紹介し、通常の爆弾とは違った被害について解説した。

七、「長崎原子爆弾について」では、長崎に原爆が投下された経緯や、広島型原爆との違いについて解説を行った。

八、「被害の状況」では、原爆投下時の浦上地区の様子や、被爆の実相について解説した。特に、後者では被爆者である下平作江氏[18]の手記を取り上げ、生き残った被爆者もケロイドや放射能障害などにより、様々な差別や偏見と向き合わざるを得なかったことを述べた。

九、「被爆後」では、永井の被爆直後の救護活動や終戦後の講義・講演・執筆活動について解説し、永井が、自身の住む浦上という社会の共同体の一人として、大学、教会、長崎、ひいては日本の復興を、そして世界に平和を確立するために、書くことでこれらに寄与できると考えていたことなどを述べた。

十、「浦上での再建と療養」では、まず終戦後、浦上で行われたカトリック信者による合同慰霊祭での弔辞において、永井が述べた「原爆投下は神の御摂理」とする考えを紹介し、その後、浦上での再建・療養について述べた。

十一、「永井の死」では、1951（昭和26）年５月に息を引き取った永井の死について述べた。また、長崎市公葬の様子を写した写真を、雲南市永井隆記念館から借用し展示した。

十二、「現代における永井の語り～永井の言説をめぐって①～」では、現代において永井の言説の評価が割れていることについて解説を行った。長崎市内で原爆被害の程度に差があり、長崎市街地の被害が比較的軽微であっ

たことが、のちに原爆についての考え方や態度で長崎市民の間に温度差や対立を生じることとなったなどの社会的状況があったことを解説した。そのような中での永井の原爆に対する考えや発言について、否定的な意見があることを述べた。

十三、「現代における永井の語り～永井の言説をめぐって②～」では、永井の言説を肯定的にとらえる意見を紹介したうえで、近年浦上地区の丹念な聞き取り調査をもとに永井の燔祭説の受容についてまとめた四條知恵の著書を紹介した。ここでは、四條の研究によって浦上地区における永井の言説の受容についての解明はなされたが、浦上地区外の被爆地域も含めたさらなる調査・研究が必要であることを述べた。

以上がパネル展示の紹介であるが、展示室の中央に置いた展示ケースでは、当館で所蔵している永井隆自筆サイン入りの寄贈本や、このたび当館の書庫から発見された永井隆寄稿収録の雑誌『聖母の騎士』も数点展示した。

以上のようなパネル・資料展示により多面的な「永井像」を提示し、来場者が改めて「永井像」について再考する機会とした。

2.6　広報

広報活動としては、事前広報として企画書・ポスターが出来上がった段階で、本学の企画部企画広報情報課を通じてマスコミへの周知を図った。結果、テレビ局が２社取材に来て、１社は後日報道された。このほか、以前別の企画展などで名刺をいただいた新聞各社の記者にメールで企画展の案内を出した。後日地方紙を含む３社から取材を受け、紙面に掲載された結果、多くの市民の来場にもつながった。

チラシやポスターについては、館内での配布・掲示のほか、大学構内のデジタルサイネージ（大学正門、メインストリート）も活用して案内を流した。また、地域の公民館や公共図書館へも送付し配布や掲示をお願いした。

2.7　アンケート結果

来場者にアンケートをお願いした。方法としては、出入口付近にアンケート用紙を置き、記入してもらうというもので、近くに回収箱も設置した。その結果、45名からの回答が得られた。これまでの「戦争と平和」展の中では、

一番多い回答数となった。

アンケートの回答者を見てみると、年齢層としては50代が13人と一番多く、次いで60代が８人、40代と70代が７人ずつとなった。また、居住地は松江市内が圧倒的に多いが、中には雲南市からの来場者もあった。また、回答者の身分だが、一番多かったのは市民（27人）であり、次いで本学教職員（11人）、学生（６人）となっている。ここからは、市民の企画展への関心がより高いことがわかる。

次に来場目的の項目をみると、企画展観覧が目的で来館した人は29人、図書館利用やその他のついでであった人は15人であった。企画展が一般市民を図書館へ誘う装置として成功しているとみてよいだろう。

また、本展をどのように知ったかという項目では、学内の掲示・チラシが15人と一番多く、次いで知人からの口コミが10人、その他（学内一斉メールほか）、新聞といった順になっている。ここからは、広報活動として学内への掲示や一斉メールが有効であることと、口コミや新聞記事などを活用した学外への情報発信が大切であることがわかる。

展示内容については、「大変良かった」が30人、「良かった」が14人、「普通」が１人と、概ね好評であった。コメントは、「よく調べられ、よくまとめられており、大変分かり易かった」という趣旨の内容が多かったが、一方で「もう少したくさんの展示物があれば」、「松江や島根大学と永井の関係がもっと知りたかった」という声も寄せられた。

印象に残った展示として「永井隆の「原爆」とそれをめぐる批判」や「浦上燔祭説の検証」といった、永井の言説をめぐる最後のパネル展示を挙げた回答者が多かったことは、永井という人物像について多角的な見方があるのだということを、ある程度提示できたという感触を持った。

最後に、今回の展示内容についての意見・感想を聞いた項目では、「永井の言説についての意見を多角的に示した展示は、来場者が言説について考える上でとても役立つと思います。（教員）」、「様々な視点から永井さんについて知ることが出来てよかったです。パネルの文章も大変わかりやすく、もっと学生にも広まってほしいと思いました。（学生）」といった好意的な意見をいただいた。また、「この種の企画をつづけておられる姿勢に敬意を表します」といった、これまでの継続的な企画展の開催について評価していただいたコ

メントや、「永井隆・長崎の被爆が島大生にどのように受け止められてきたか、その展示を加えればさらに広い学生に自分たち（に近い）問題として感じ考えてもらえるのではないか。例えば、これら（永井隆・長崎の被爆）に関する卒業論文の調査と展示など、展示自体としても大学附属図書館としても重要と思います。」といった、筆者や当館にとってさらなる課題も与えていただいた意見もあり、大変貴重なアンケートとなった。本稿末尾に、別図としてアンケートの集計結果も掲載している。

3．関連イベントについて

3.1　関連図書の展示

本展の開催にあわせ、関連する図書の展示を行った。毎年職員へ呼びかけて本を紹介してもらい展示しているが、今年は25冊の図書を展示した。

3.2　ギャラリートーク

過去の企画展では、ギャラリートークとして戦争体験を聞く機会を設けてきたが、今回の展示ではパネルや借用した永井の資料について丁寧な解説も重要と考えたため、企画展の担当をした筆者が２回にわたり解説を行った。

第１回目（７月31日）は試験期間中の開催であったこととともあり参加者のほとんどが学外者であったため、参加者からは「なぜもっと若い人が来ないのか」といった声も聞かれた。２回目（８月６日）は試験終了後に開催した。

図５　ギャラリートーク風景

両日あわせて14人の参加があり、来場者は熱心にメモを取るなど話を聞いていた。

また、これとは別に知り合いの教員に依頼され、個別にギャラリートークを行った。こちらはカトリック教会の方々で、永井について事前に勉強されており、ギャラリートークの際も積極的な質疑応答がなされ、その熱心さが伝わってくる会となった。

4. おわりに

最後に、今回の企画展で得られた成果と今後の課題について述べたい。

今回の企画展の趣旨として、多面的な「永井像」を提示し、来場者が改めて「永井像」について再考する機会としたいというねらいがあった。これについては、アンケート結果や実際の来場者の感想からも分かるように、一定の成果は得られたように思う。

また、これは毎年の課題であるのだが、学生の来場が少なく企画展の手法に毎回悩むところである。しかし、今回アンケートに寄せられた「学生が受け止めてきた『戦争と平和（今回は永井や長崎原爆)』や卒業論文の調査・展示」など、今後の展示の在り方につながる意見・感想が寄せられたことは本展の収穫である。

他にも、今回雲南市の永井隆記念館と資料の借用を通じて関係が築けたことは、大きな収穫であった。企画展にも、藤原重信館長はじめ雲南市教育委員会の方も来場いただき、当館の所蔵資料を見ていただく機会ともなった。今後は、新しくなる永井隆記念館とも資料の貸借等を通じて連携できればと考える。

今回、展示を通して「永井隆像」という一般的な語りの中での「表象」だけでは、学術的な論点となっている彼への評価を正視することが出来ないこと、そしてそのような語りを安易に顕彰化されることへの危惧を提示したつもりである。確かに永井の功績やその発言は、戦後の浦上カトリック信徒にとって評価されるものであったことは違いないが、まさにその永井の言説がもたらした表象によって、反原爆の思いを胸の中に抱え込まざるを得なかった人々がいたであろうことは、高橋の論に首肯せざるを得ない。

それでも、永井のすべてを否定的にとらえるのではなく、彼の研究や医学

への姿勢、原爆投下直後における救護活動など、後世に伝えたい／本学の学生に伝えたいところは丁寧に、このような機会を通じて今後も紹介できればと考えている。

付記

企画展を開催するにあたり、当館の情報サービスグループのスタッフからは様々な協力があった。また、貴重な資料を快く提供いただいた、雲南市永井隆記念館館長藤原重信氏はじめ、雲南市教育委員会の方々、田野博子氏、竹永三男名誉教授には大変お世話になった。記して御礼申し上げる。

注

（1）過去の企画展については、拙稿「大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」：企画展「戦争と平和を考える2014」より」（淞雲：島根大学附属図書館報 17、2015年）および「2017年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を考える2017―記録された戦争体験―」実施報告」（淞雲：島根大学附属図書館報 20、2018年）をご覧いただきたい。

（2）入場者数については、入り口に赤外線カウンターを設置し、計測を行った。

（3）島根県雲南市三刀屋町には、永井隆記念館が1970（昭和45）年に建設・竣工された。これは、永井の母校である飯石小学校区の有志から、「明治100年を記念し郷土の偉人永井隆の顕彰碑を建設したい」という申し出が三刀屋町に対してあり、それが「記念館」建設へと発展したものだった。現在は施設整備のため休館中であり、2020年４月末に再開の予定である。詳しくは雲南市HPを参照のことhttps://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kankou/spot/iseki/musium07.html、（参照2018-12-24）。このような施設のほか、「“平和の使徒”永井隆博士の精神を、未来を担う若い世代に伝え、人類普遍のテーマに取り組む機会と出会いの場を提供し、明るい日本の未来づくりに期する」永井隆平和賞を毎年募集し、優秀作品を表彰しているなどの顕彰活動を行っている。

（4）片岡弥吉『永井隆の生涯』中央出版社、1961年

（5）その被害については、長崎市編『長崎原爆戦災史』第１～５巻（長崎国際文化会館、1977年－1984年）などが参考になる。

（6）広島市長崎市原爆災害誌編集委員会『広島・長崎の原爆災害』岩波書店、1979年

（7）永井隆『原子爆弾救護報告書』1945年

（8）高橋眞司『長崎にあって哲学する－核時代の死と生』北樹出版、1994年

（9）岡本洋之「永井隆はなぜ原爆死が神の摂理だと強調したのか？」（『教育科学

セミナリー』第42号、関西大学教育学会、2011年）

（10）山田かん『長崎原爆・論集』本多企画、2001年

（11）井上ひさし『ベストセラーの戦後史１』文藝春秋、1995年

（12）片岡千鶴子「永井隆と『長崎の鐘』―被爆地長崎の再建―」（長崎純心大学博物館磯村平和文庫編、片岡千鶴子・片岡瑠美子編『被爆地長崎の再建』同博物館、1996年ほか）

（13）本島等「浦上キリシタンの受難―禁教令、四番崩れ、原爆―」（『聖母の騎士』2000年10月号、聖母の騎士社）

（14）いずれも岡本洋之前掲論文より引用

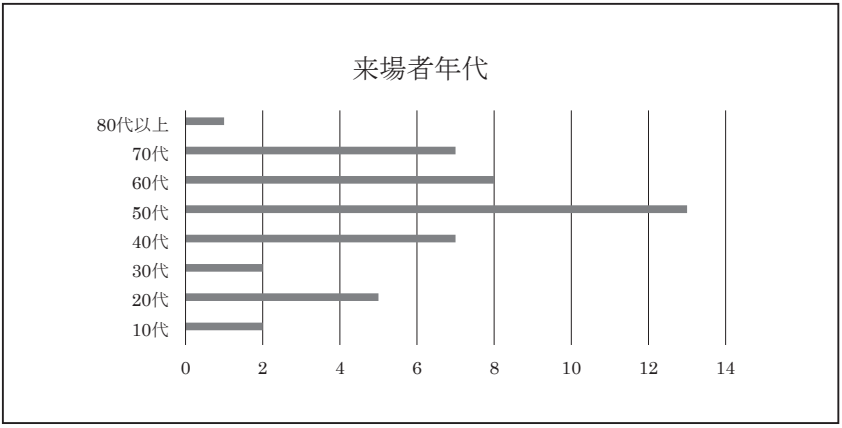
（15）「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」（広島市の平和記念公園にて行った「広島アピール」、1981年２月25日）や、「皆さんがきょうまで耐えてこられた苦悩は、この地球に住むすべての人の心の痛みとなっています。皆さんの生きざまそのものが、すべての善意の人に向けられた最も説得力のあるアピール――戦争反対、平和推進のため最も説得力のあるアピールなのです。」（恵の丘長崎原爆ホームで述べたメッセージ、1981年２月26日）などの発言。

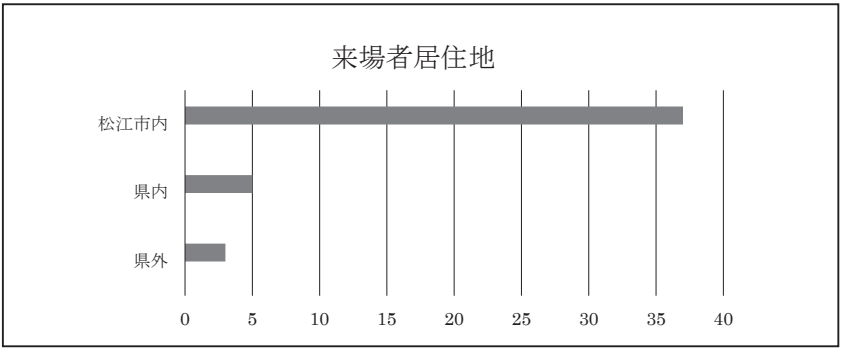
（16）四條の論については、黒川伊織「四條知恵著『浦上の原爆の語り：永井隆からローマ教皇へ』（特集 ブックレビュー「戦後70年」『原爆文学研究』15、花書院、2016年）も参考になる

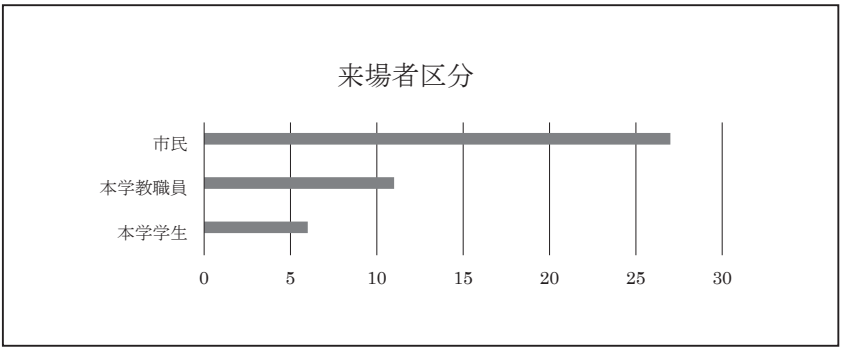
（17）田野俊貞は、1855（安政２）年栃木県足利市生まれ。1884（明治17）年に島根県医学校教諭、松江病院長として赴任したが、1886（明治19）年には医学校廃校により辞任し、その後松江市苧町の現在地に安仁堂田野医院開業した。

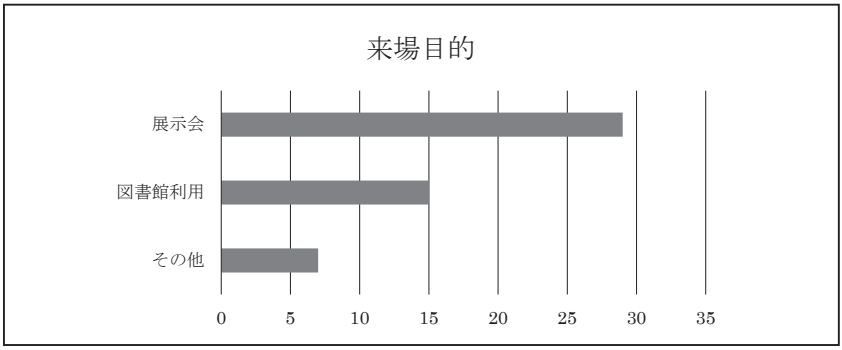
（18）下平作江は、1935年（昭和10）１月１日中国（旧）満州国遼陽市生まれ。1940年（昭和15）両親が遼陽市で殺害され、長崎市の親戚の家にひきとられた。長崎市駒場町（現松山町）に住んでいたが、城山国民学校５年生のとき（1945年）爆心地から800メートル地点で被爆。被爆後は養父・瀧川勝のもと、当時戦災者と称していた被爆者を中心とした互助組織であった長崎戦災者連盟や、後の被爆者運動にも関わった。被爆体験を語りつづけて今日に至る。講話回数は１万回を超えた。長崎原爆遺族会顧問。下平から聞き取りを行って明らかにした長崎戦災者連盟の活動については、拙稿「長崎被爆者運動と戦災者組織（特集 原爆投下と被爆者）」（『戦争責任研究』74号、日本の戦争責任資料センター 、2011年）を参照。

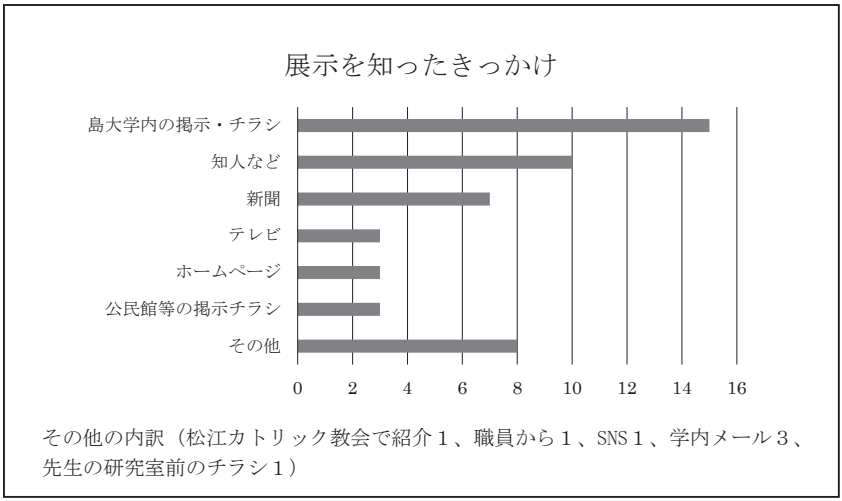
別図　戦争と平和展　来場者アンケート結果集計

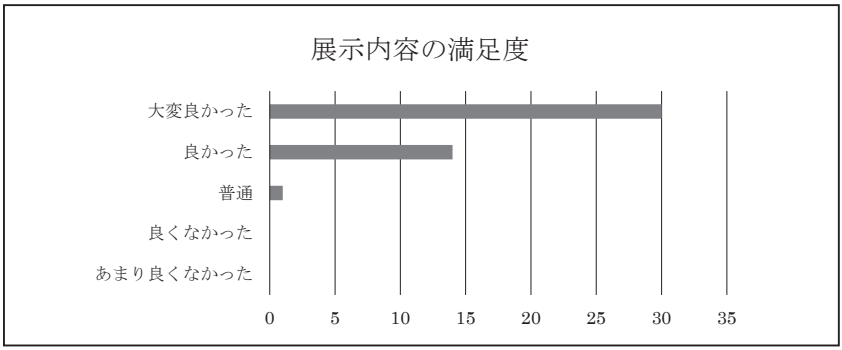







来場目的
展示会
図書館利用
その他
0
5
10
15
20
25
30
35


展示を知ったきっかけ
島大学内の掲示・チラシ
知人など
新聞
テレビ
ホームページ
公民館等の掲示チラシ
その他
0
2
4
6
8
10
12
14
16
その他の内訳（松江カトリック教会で紹介１、職員から１、SNS１、学内メール３、先生の研究室前のチラシ１）


展示内容の満足度
大変良かった
良かった
普通
良くなかった
あまり良くなかった
0
5
10
15
20
25
30
35